

教育民生常任委員会 摘 録

1. 開 催 日 令和7年11月5日(水) 第2委員会室
2. 出席委員 前田智永委員長 國利知史副委員長 近藤久子 岡野茂 青山学 松森潤平
3. 欠席委員 なし
4. 事務局職員 橋本和憲議会事務局主任主事
5. 説明員 松永智子高齢者福祉課長 元永貴美江高齢者福祉課主幹 山廣依子高齢者福祉課地域包括支援センター係長 亀竹恵巳高齢者福祉課地域包括支援センター専門員
6. 傍聴者 なし
7. 会議に付した事件
 - 1 健康寿命の延伸について
 - 2 男女共同参画について
 - 3 その他

午後1時27分 開 議

○前田智永委員長 教育民生常任委員会を開会します。本日の出席委員は全員ですので、直ちに会議を開始します。本日の会議において、傍聴、写真撮影、録音、録画を許可しています。

1 健康寿命の延伸について

○前田智永委員長 本日は、高齢者福祉課の皆さんにお越しいただき、閉会中の継続調査の項目となっている健康寿命の延伸について意見交換を行います。最初に、来られた方の自己紹介の後に、提示しておいた計画について少し話をしてください。

○松永智子高齢者福祉課長 高齢者福祉課長の松永です。よろしくお願いいたします。

○元永貴美江高齢者福祉課主幹 高齢者福祉課主幹の元永です。よろしくお願いいたします。

○山廣依子高齢者福祉課地域包括支援センター係長 高齢者福祉課地域包括支援センター係長の山廣です。よろしくお願いいたします。

○亀竹恵巳高齢者福祉課地域包括支援センター専門員 高齢者福祉課地域包括支援センター専門員の亀竹です。よろしくお願いいたします。

○前田智永委員長 課長。

○松永智子高齢者福祉課長 それでは、本日の議題である健康寿命の延伸について、高齢者福祉課の取組を御説明いたします。あらかじめ高齢者福祉計画を御覧いただくようお願いしていましたが、こちらに沿って御説明いたします。本体の59ページからになりますのでお開きください。健康寿命の延伸といたしましては、高齢者福祉課と保健医療課が連携を図り、59ページにある、基本政策1「健康づくり・介護予防の推進」にて取り組んでいます。まず、(1)健康づくりの推進ですが、介護予防の取組と、高齢者が健康で生き生きと暮らし続けるために、生涯にわたる生活習慣の改善を重視した健康づくりを推進することとしています。①生活習慣病予防の推進では、保健医療課が主体となって、

自らの体の状態を知り、生活習慣を改善するため、高齢者の健診受診率の向上、また、検診結果をもとにした予防教室の実施など、特に糖尿病と高血圧の対策に取り組んでいます。②保健事業と介護予防の一体的な取組の推進では、国民健康保険や協会けんぽなどの現役世代の保険者が、75歳になって後期高齢者医療に切り替わっても、重症化予防などの保健事業や、介護予防事業が切れ目なく実施できるよう、一体的な取組を行っています。中でも糖尿病は年齢を重ねるごとに重症化しやすいため、切れ目のない糖尿病予防の支援を行っています。また、②のイ、集まり場に対する専門職の積極的関与につきましては、本市が推進する集まり場に理学療法士などの専門職が関わり、講座や健康相談を通じて、高齢者が自らの健康状態に関心を持ち、フレイル予防に取り組んでいただくよう働きかけを行っています。昨年度は44カ所で実施し、延べ参加者数は586人でした。専門職の活動回数に制限はありますが、今後も多くの集まり場でフレイル予防に関する啓発ができるよう、団体や世話人の皆さんと連携して取り組んでまいります。続いて、60ページをお開きください。(2)介護予防・重症化防止の推進です。まず、①フレイル・介護予防普及啓発といたしまして、自治振興区などと連携し、フレイル予防講座を推進しています。令和6年度は22自治振興区、28会場で行い、延べ参加者数は439人でした。②住民主体の介護予防活動の促進といたしましては、皆様御存じのとおり、本市はシルバーリハビリ体操の普及啓発に取り組んでおり、令和6年度末時点で、2級指導士169人、1級指導士7人を養成しています。また、令和6年度のシルバーリハビリ体操教室などの開催は、前年度よりも19回多い610回、延べ参加者数は前年度よりも335人多い6,397人でした。指導士の活動は、指導士会に主体的に活動していただいておりますが、活動する上での課題解決や、指導士の養成などのため、指導士会と協力し、さらなる普及啓発に努めてまいりたいと思っています。続いて、61ページ、(3)高齢者が活躍できる仕組みづくりの推進です。介護予防において、人と人とのコミュニケーションは重要な役割です。国勢調査によると、全体の世帯数に占める独り暮らし、もしくは高齢者夫婦のみの世帯数の割合は、平成22年度では28.7%、平成27年度では31.7%、そして前回の令和2年度では33.4%と、年々上昇している状況です。そのため、高齢者の孤立を防ぎ、人と人とのコミュニケーションによる介護予防の取組といたしまして、集まり場の推進に取り組んでいます。令和6年度の実績といたしましては、地域デイホームは35団体、64カ所で開催され、延べ参加者数は9,092人、サロンは137カ所で、延べ参加者数は1万1,848人です。課題といたしましては、参加者の減少や世話人などの担い手不足です。自治振興区単位で世話人交流会などを行い、集まり場の取組や課題を共有するとともに、協議体という多様な団体の集まりの中で、集まり場の継続などについて協議を行っています。今後、高齢者全体の人口は減少する見込みですが、高齢者のうち85歳以上の高齢者の割合はどんどん高くなる見込みです。今年度、9月末時点で、65歳以上の高齢者のうち85歳以上の高齢者は26.7%ですが、国立社会保障人口問題研究所の推計値では、10年後の2035年では32.1%、さらに、20年後の2045年では34.8%という推計があります。年齢が上がれば上がるほど介護度も進み、比例して介護サービス給付金額も増嵩することになり、市の財政の圧迫にもつながりかねないことです。20年後の85歳は、まさに今の65歳です。現在、本市では、令和9年度から令和11年度を計画期間とする第10期の計画策定に向け準備を進めていますが、課題意識を持ち、地域や関係者の皆様、また議員の皆様方の御意見や情報を頂きつつ、健康寿命の延伸、介護予防の施策を検討してまいりたいと思っています。以上で高齢者福祉課からの説明を終わります。

○前田智永委員長 たいま御説明いただきました。委員の皆様は、質疑等があれば挙手の上、発言を

お願いいたします。近藤委員。

○近藤久子委員 シルバーリハビリ体操は、市民会館で、本当に多くの方に来ていただいて応援をされて、尾道でもされていて、本当に素晴らしい継続されたことで、それぞれの健康寿命の延伸に大いに役立っています。今、1級指導士が7人、2級指導士が169人で、令和6年は610回もされて、6,397人も参加と。それが、皆さんが望んでおられる数値なのか、今からもっとしないと大変だと思っておられるのか。参加者をもっと増やすためには、もちろん指導士のランクも上げないといけないし、指導士になりたいという人をどのようにつかんでおられるのか。その辺を教えてください。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 シルバーリハビリ体操は、近藤委員が言われたように、住民主体ということで、庄原市の大きな介護予防の事業だと考えています。2級指導士につきましては、もしかすると保健医療課が説明したかもしれませんが、健康づくり推進計画、令和11年度までの計画の中で、累計220人を目標にしています。ですので、指導士の養成数については目標を立てています。一方で、体操の回数であるとか参加者数については特に目標を設けてはいません。ただ、今、体操は1回ではなく定例開催のところが複数箇所あります。そういうところが、今後、高齢者の方が増えていくとは言えないので、まずは維持することを目標に支援していきたいと考えています。

○前田智永委員長 近藤委員。

○近藤久子委員 もちろん、庄原市全体での普及がとても大切だと思います。地域の偏りがあってはいけない。そういう面で、旧庄原から7つあるのですけれども、そのような地域的なことはどうですか。くまなくされているのでしょうか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 それは指導士の数というよりも活動のことですね。

○近藤久子委員 はい。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 ホームページには載せているのですが、先ほど申しました体操教室を各地域でまとめています。そこでは、旧庄原から総領地域までくまなく実施しています。ちなみに、回数で申しますと、簡単に言うと、約の話ですが、昨年度は庄原で300回、西城で70回、東城で140回、口和で15回、高野で35回、比和で20回、総領で45回と、少し地域差はありますが、各地域で実施していただいています。

○前田智永委員長 近藤委員。

○近藤久子委員 参加された方の感想が、またシルバーリハビリ体操に行ってみようかなということにすごく大きく左右すると思います。そういうPRですよね。それから、指導士の方が受けられている参加者の方の生の声、健康状態が上向いているとか、上向いていなくても普通の状態、今の状態が続いているとかそういうことは聞いておられると思いますけれども、どうなのですか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 全てではないのですけれども、希望されている教室の指導士の方、その教室に定例的に参加されている方の体力測定、計測等を行っています。その中で、基本は高齢の方なので、維持であったり緩やかな下り坂を目指すということで測定などを行っています。

○前田智永委員長 近藤委員。

○近藤久子委員 このシルバーリハビリ体操は、どこでもできる、誰でもできるといううたい文句です。

ということは、自宅で療養されてる方に対しても何らかの動きができるとかそういったことも今からとても大事になってくると思いますけれども、指導士の方々の声というのは、今からどういうところを指導しないといけないとか、体操だけではなく人間関係の構築も要るかもしれませんよね。そういうところはどうかのですか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 まさしく近藤委員が言われたことは、特にコロナのとき、集まることを制限されていたときに指導士の方が、そうは言っても指導士が複数いないとできない体操はあるのですけれども、自分の近くとか知り合いのところに行かれる中で、ふだんの話の中で体操のよさなどを伝えてくださっていたという話は聞いています。今のシルバーリハビリ体操では、指導士が複数で集まり場に行かせていただいてとか、お家に複数におられるところとするという決まりにしています。決まりを設けないと、指導士の方の活動の負担になってはいけませんので。けれども、そのように指導の件数に上がらなくても、指導士としての自覚を持ってお隣や御家族に個別で普及していただいている実績があることを聞いていますので、そういうことが必要なのだなと。それが、近藤委員が最初に言われた、どこでも、家でもできる、外に出られなくても、寝たきりになってもできるという文句もありますので、そういうところに波及していけばいいなと思っています。そこは指導士会の皆さんと相談しながら進めていきたいと思っています。

○前田智永委員長 他にありますか。松森委員。

○松森潤平委員 59 ページ、②のイ、集まり場に対する専門職の積極的関与ですけれども、集まり場に専門職の方が行かれて、実際にどのような相談があるのか、分かっている範囲で教えてください。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 基本的に行かせていただく専門職は、本市の職員でいうと保健師や栄養士です。そして、本市には理学療法士がいませんので、医療機関または介護施設の理学療法士の方に集まり場に行っていただいて話をさせていただくのですけれども、基本的には、健康寿命にはフレイルの予防が大きく関与しているので、フレイル予防の話をさせていただいています。ただ、その中で個別に計測などを行う中で、保健師ですとフレイルだけではなく全身の話をさせていただいたり、栄養士ですと食事の話をさせていただいたりとか、基本はメニューを持っていくのですけれども、その場で個別に出た相談には対応する。例えば、介護保険の相談をしたいと言われたら、そこで対応したりしていますが、主には、テーマであるフレイル予防のお話をさせていただいています。

○前田智永委員長 松森委員。

○松森潤平委員 いろいろな相談をされている実態があるということで、よく分かりました。

○前田智永委員長 他にありますか。岡野委員。

○岡野茂委員 65 歳以上の人口の中で 85 歳以上の人口の割合が高まっていくということで、かなり割合が高まるのですけれども、今の人口と比べてどうなのでしょう。要は、65 歳以上が何パーセントで、どんどんパーセントが上がっていくのですけれども、人口が減っていくので、85 歳以上の人口は同じように増えていくのですか。減っていくのですか。

○前田智永委員長 課長。

○松永智子高齢者福祉課長 人口のことですが、全体的には 85 歳も合わせて緩やかに減じていきます。ただし、今から 10 年後の 2035 年から 2040 年、よく 2040 年問題と言われる時期なのですが、このと

きには、人口問題研究所の推計値によると、85 歳以上の方がぐっと上がる時期があります。15 歳から 64 歳までの生産年齢人口は全体的にずっと下がっていくという推計の中で、その辺で 85 歳以上の方がぐっと上がると。これが 65 歳以上の高齢者になると、ずっと緩やかに下がっていく推計なのですけれども、85 歳だけその期間でぐっと上がります。人数でいいますと、庄原市内の総人口が、2035 年の推計値で 2 万 4,534 人。これに対して、85 歳以上の人口が 3,585 人という推計です。その 5 年前、2030 年でいいますと、2 万 7,078 人の人口に対して、85 歳以上が 3,238 人という推計で、2035 年は、人口は減りますが、85 歳以上が増えるという推計値が出ています。

○前田智永委員長 他にありますか。青山委員。

○青山学委員 62 ページにある敬老事業の実施で、100 歳を迎える方への敬老祝金のことなのですが、これが長寿であることの喜びと生きがいに結構つながっているのか、どのくらいの反響があるのか。私は近くに 100 歳の方が全然おられないので、そういった実態を教えてください。

○前田智永委員長 課長。

○松永智子高齢者福祉課長 今年度でいいますと、106 人の方をお祝いしています。この 100 歳を迎えられた方のお祝いは、国からのお祝いの品で金杯がありまして、合わせて市から祝金をお渡ししています。全体的には、郵送や口座振込などによるため直接の声は聞けないのですが、御希望の方には市長が表敬訪問して手渡しをしています。今年も 3 名の方に御希望いただいて実施いたしました。皆さんお元気で、100 歳を迎える喜びというのがとてもよく伝わってきます。市長をお迎えするというところで、とてもすてきな格好といたしますか、希望を持っていたいているなど。また、会話の中で、これまで歩んでこられた人生をしっかりと語っていただいて、どうやって健康を保つかというような、自分が気をつけていくことなどもお話しいたいています。直接手渡しができることは大変数少ないかもしれませんが、そうやって語っていただく。先ほど言った集まり場の意味合いもあろうかと思いますが、その辺りでは一助になっているのかなと思います。加えて、敬老会の補助も行っています。敬老会は自治会などが中心となって行ったださっていますが、敬老会というセレモニーを開催する、またはそれぞれの地域の方のところに訪問して敬老のお祝いの品を届けていただくとか様々な形がありますが、全て、高齢者の皆様と顔と顔を突き合わせての、年に 1 回でもそういう機会があるということで、地域の方にもしっかりと取り組んでいただけているという状況もあります。

○前田智永委員長 他にありますか。副委員長。

○國利知史副委員長 シルバーリハビリ体操指導士を養成されて現場で体操を頻繁に行われていることは承知していますし、先ほど説明があった、集まり場に専門職が、保健師と栄養士が行かれているとのことですが、シルバーリハビリ体操指導士と保健師のちょうど中間あたりの、例えば、職員で健康運動指導士とかそういった資格を持っている方はおられるのですか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 保健師の中で健康運動指導士の資格を持っている者は、今はもういません。國利委員も多分御存じのとおり、更新が必要です。この資格は、例えば、ケアマネジャーのように市の中に必要だとか置くべきだということではないため、個人資格になってしまう部分があって更新が難しいということで、資格を有していた者もずっと更新することはできていません。それと、健康運動の実践者については資格の更新は特にはないのかなと思いますので、2、3 名いるとは聞いています。

○前田智永委員長 副委員長。

○國利知史副委員長 例えば、トレーニングというか、運動メニューを組むといったことも健康運動指導士ならできるはずですが、もちろん、その中間の部分でシルバーリハビリ体操指導士も必要なのだけれども、希望者にはフレイルを予防するパーソナルなトレーニングのメニューを組むとかそういった取組は計画されてないのですか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 全体的にはそのことはできていないのが実態ですが、よしあしは別として、この事業は本庁・支所がそれぞれ取り組んでいるところもありますので、支所によっては、近くの施設の理学療法士に来ていただいて一人一人メニューを組んでいる事業もあります。また、先ほど言われた、61 ページの集まり場に専門職、理学療法士が来た場合は、先ほど言いましたように、最初に保健師が計測であるとかフレイルのチェックをさせていただいて、一人一人は難しいのですが、その集まり場の方の傾向、どういうところができていて、どういうところをもう少し運動で頑張られたらいいですよというのを理学療法士に集団でのメニューとしてまとめていただいて、2回行っていただいて、そこで説明していただいています。

○前田智永委員長 副委員長。

○國利知史副委員長 私は庄原市内に住んでおられる健康運動指導士の方で知っている人が数人います。以前話を聞いたときには、例えば、市の事業とかで健康運動指導士が活躍するイベント・事業のときに、外部から健康運動指導士を呼んで講演をしていただいたことがあったみたいですが、実は庄原にもおられるということで、そういう、健康運動指導士の方が活躍できる場面があれば、できれば地元の方を使っただいて事業を計画していただければなという思いもありますので、伝えておきます。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 いい情報といえますか、私ではありませんが、数年前にそういう話をさせていただいたことは聞いてまして、本市の事業で、地元の方を含めどのような健康運動指導士の方にしているのかを調べたこともあります。それでさせていただいている部分もありますが、もし今後、ぜひ紹介していただきたいなということになれば、國利委員にお願いすれば紹介していただけますか。

○國利知史副委員長 はい。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 では、月に1回程度、本庁と支所と一緒に会議をする機会があるので、こういう助言を頂いたことを伝えます。心強いです。

○前田智永委員長 議会も頑張ってまいりましょう。岡野委員。

○岡野茂委員 事業の中身は分かるのですが、予算の組み立てがよくわからないのです。こういう事業をされているのは、介護保険特別会計の地域支援事業の中のメニューということで理解してよろしいのですか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 ほとんどがそうですが、59 ページの、②保健事業と介護予防の一体的な取組の推進の事業については一般会計です。保健医療課で広域連合からの10分の10の委託事業で行っています。それ以外は特別会計の地域支援事業のものです。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 高齢者の人口ですけれども、70 歳くらいから女性のほうが、圧倒的に人口が多いのですよね。男性は徐々に、女性よりも減っていく傾向があるように思います。例えば、サロンなどの集まりでも、女性が多くて男性がなかなか集まらないというところがあると思います。こういう予防の事業を行うに当たって、男性への啓発というか、参加を高めることが課題ではないかと常々思いますけれども、その点についてはどうでしょうか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 まさしく岡野委員がわれたとおり、男性の方の集まり場への参加比率というか数を見てもかなり少ないのが実態で、ちょうど先週か先々週に、地域ワーキングというか、そういう課題を持ち寄ってどのようにしていけばいいのかを話し合う場でもそういう話題が出ました。その中で、男性が多いところで話をさせていただいているデイホームの世話人の方がおられたのですけれども、よしあしは別として、先ほど岡野委員が言われたように、男性の方は地域で女性よりも役員をされています。そういう役員の方々を対象としてサロンを組み立てたということで男性の多いところがあることも聞いていますし、昨年度よりも前でしょうが、社会福祉協議会が健康マージャンを推進されています。決めつけてはいけないのかもしれませんが、男性はある意味勝負事が好きだということで、男性の方が参加しやすいメニューを考えられたり、男性と女性が混在するよりも男性だけのほうが集まりやすいということで仕掛けられたとも聞いています。答えになってないかもしれませんが、課題意識は持っています。今後、サロンのメニューであったり参加者の呼びかけなどを工夫されていることを集めてみようという話になっていますので、そういうことを求められれば御紹介できるかなと思いますし、むしろ、その辺りは議員のほうがたけておられるので、いい助言があれば教えていただきたいなと思います。

○前田智永委員長 他にありますか。近藤委員。

○近藤久子委員 関連なのですが、デイホームを長くをしてきて、大勢ではないのですけれども男性が必ず来られています。何の違和感もなく。だけれども、もしそこに近所の男性が2、3人入られたら、何か雰囲気が変わるというか、面白くないのかなと思います。東京都内に研修で行ったときに、マージャンをするから新聞を必ず取る、経済新聞も必ず取る。それを置いておく。そうしてたわいもない話をして、さあゲームをしましょう、さあ歌を歌いましょうではなくて、集まって顔を見ようくらいの軽い気持ちで、新聞を置くというのはそういう発想ですよ。お金がかかっても。うちの場合は女性が多いのですけれども、グランドゴルフをする人は一緒にしようと、それで一緒に鍋を囲む会をしています。無理やり来てもらおうとか男性もということではなくて、男性が集まる行事と一緒にデイホームをしている。それも毎年の行事になりました。それがまた次に、地域の盆踊りもつながっていくし、つながりをつくろうと思ってするのではなく、そういうふだんの何気ない行事の中で培われることかなと思っています。そうすると顔も分かるし、年々衰えていく人たちも分かるだろうし、ここにこういう人がおられたのかなとか、家族のことも、聞かなくても分かり合える関係が地域の中でできる。だから、無理やり男性をではなく、一緒にできる方法を考えるのも1つの方法かもしれませんね。

○前田智永委員長 他にありますか。近藤委員。

○近藤久子委員 関連して。集まり場をつくるのはいいのですけれども、世話人不足のことが必ず出てきて、毎年課題になって、解決策はこうですというのは出てこないのです。そこをどうしていくのか

ということだと思います。世話人の方も高齢になって、今しているのは、世話をしている私たちを世話する人はいないよねという話なのです。年齢的に、振り向けば、団塊の世代が今、一生懸命していても、その下がないという、その怖さというか。でも、いずれ訪れると思います。合言葉は、できるときにできることをしようと。だけれども、行政側としても、世話人が不足していますということだけではなく、どのようにすればいいのかというお考えを一行でも入れていただくのがいいと思います。相談等により支援しますと。相談したときにどのようなお答えを頂けるのかは分かりませんが、大変厳しい状況になると思います。

○前田智永委員長 世話人不足への対応策についての考え方があればお願いします。主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 最初に課長が述べましたように、各地域、7圏域ごとではあるのですが、世話人交流会を行っています。その中で、先ほどの世話人の課題のこと、次の担い手がなかなかいないから大変だとかそういったことを聞かせていただいて、聞いてそれをどうしていくのかというのは次の段階だとは思っています。サロンもデイホームもそれぞれでしていただいているので、同じような取り組みをすれば全部解決ということではなく、それぞれにあるかとは思いますが、まずは自分のところだけではないのかなということ、みんなでお互い頑張っているねということ共有する場があることが1つと、先ほど申しましたサロンに対する集まり場の課題で世話人のこともあります。どういうメニューをすればいいのかな、しかも、申し訳ないけれども予算が少ない、市からの補助なども少ない中で、どういうことをすればみんなが楽しく時間を過ごせるのかなと考えることも悩ましいという声もありますので、先ほど言いましたように、メニューを情報収集して、こういうこともありますとか、無料の講師はこういうところから呼べますとか、そういう運営に対する支援ができたかなということはありません。いずれにせよ、課題意識は持っています。今日は私が1人で言っているのですが、みんなで考えていきたいと思ひますし、今後、実際に現場で活躍されている世話人の方からの声もしっかり聞いていきたいと思ひています。

○前田智永委員長 近藤委員。

○近藤久子委員 その中で、東城支所の保健師とか担当課の人から、かるたを作ったと。今度は災害のときの携帯用のオムツを作ろうとか、いろいろアイデアを頂いて、それを組み入れてしています。それをこちらでも受け止めて一緒にすれば、行政がすごく身近に感じますよね。市の職員が来られているということだけでも、何かこう雰囲気が変わりました。そういうことは非常にありがたいことなので、どこの地域においても大いに出かけて行って、いいアイデアを出してあげて、みんなの中に入って一緒にしていただければ相談もしやすくなるかなと思ひます。よろしく願ひします。

○前田智永委員長 他にありますか。副委員長。

○國利知史副委員長 60ページの、①フレイル・介護予防の普及啓発のところで、若いうちから介護予防の必要性を理解し、介護予防活動に取り組むことができるよう、啓発に努めるという説明があるので、すけれども、具体的に、どの辺りの年齢の若い方に対してどういうアプローチをしていくのかということがあれば教えてください。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 フレイル予防講座を自治振興区単位で、高野の場合は2つの自治振興区で1つなのですが、行っています。その際に、基本的には社会福祉協議会に委託していますが、そのチラシを、年齢的なことは、フレイル予防だから高齢者ではあるけれども、どなたでも参加できま

すよと案内しています。それと、主にはそういう集まり場ですので、世話人の方にも声かけをしています。世話人は65歳以上の方も多いのですけれども、自治振興区の役員であるとか、そういう関係する方々に声かけをしてもらうよう、社会福祉協議会にお願いしています。

○前田智永委員長 副委員長。

○國利知史副委員長 特別に若い方に向けてという形ではないという理解ですよ。私はそういう仕事もしてきたので、フレイル予防には運動はすごく重要ではないかなと。もちろん栄養とかもそうなのですけれども。若いときに、子供のときから成人するまで運動をされていた方は年を取っても運動をし続ける、競技ではないにせよ体を動かし続ける割合が高いというデータもあるので、若い方々にフレイル予防と言っても随分先のことなのでぴんときないところはあると思いますが、結果としてそちらにつながっていくことがあるので、課は全然違うのですけれども、例えば、若いときにしっかり運動に取り組んでもらえるような施策も必要なのではないかなという、私の意見です。

○前田智永委員長 付け加えて、若者に対する運動の啓発や、そういうことを高齢者と一緒にすることも大事なかなと思います。今、核家族化している中で高齢者と関わる機会が少なくなっていると思うので、例えば、子供と高齢者、社会福祉協議会でも委託や単独の事業でされていますけれども、多世代の集いというのはどういったことがあるのか、もしあればお願いします。主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 高齢者福祉課の事業となると、どうしても高齢者に特化してしまうのですが、市全体という考え方で、私が昨年度までいた保健医療課ですと、社会福祉協議会の事業もそうですし、自治振興区でウォーキング大会などをされたときに、保健師なので、健康チェックなどで行かせていただいて、交流の様子などを見させていただいています。國利委員が言われたように、それぞれが、近くでもふだんはお付き合いがあまりないと聞いていますので、そういう機会を通した運動であったりとか、とてもいいなと思いながら聞かせていただきました。これは高齢者福祉課単課ではできないと思いますので、保健医療課であるとか、生涯学習課のような教育委員会関係のところと情報共有をしながら何かできたらいいなと思いながら聞かせていただきました。まだ漠然としているのですが、何かそういうことを手がけていけたらなと思います。

○前田智永委員長 副委員長。

○國利知史副委員長 今、前田委員長からあった、多世代というか違う世代の交流のことで、先日、総領支所の裏の保健センターで、高齢者の方、障害を持たれた方、地域の子供たちがサロンに集まって、ボーリングとかいろいろなニュースポーツ、eスポーツもしながら、一緒になってフレイルを予防していこうというような取組を見学させていただいたのですけれども、すごくいい取組だなと思いました。高齢者の方、手足が不自由な障害者の方、子供たちが一緒になって同じ会場ですごく楽しそうにされていたのを見たので、そういう取組を広めてもらえればいいのかなとも思いましたけれども、そういう情報は入っていますか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 されたという話は聞いています。ただ、詳細はまだなので、また聞ければ。そこには市の保健師も参加していましたし、そういう取組を参考にというか、各地域でいろいろな課題があるので、まずそういうことを聞いていけば、我々の地域でどうことができるのかというヒントになると思います。

○前田智永委員長 他にありますか。岡野委員。

○岡野茂委員 最近、集まり場の雰囲気が、男性の方の参加が徐々に増えている気がします。その1つは、先ほど言われたように、健康マージャンが各自治振興区で広がっている。それと、モルックも、奥深い遊びだねというようなことを言われたりして、徐々に広がっています。ふだんの会話も大事なのですけれども、そういう楽しみのようなものを加えながらされているので徐々に成果が出ているのではないかと思います。おとといだったと思いますが、高ではモルックを小学生と一緒に小学校の体育館でされたようです。高齢者の方の感想は、子供とするのは面白い、交流になって刺激になるということで、毎回はしんどいのですけれども、そういう集まり場の中で、めり張りをつけて企画して行っていくことが徐々に参加を増やすことになるのかなと思います。生きがい創造型サロンというものがあります。それも男性中心のサロンなのですけれども、生産活動、野菜を作って九日市で売るとか、人は増えないのですけれども、そういう活動は結構長続きしていると思います。何かそこに楽しみのようなものをつくるのが集まることにつながるのかなと思います。それともう1つは、生涯学習課の社会体育と若いときからのフレイル予防を、生涯学習課のほうは競技を楽しむ、自分を高める活動なのですけれども、少し時間を頂いて、そういう啓発もしながらスポーツを推進する、連携していくことも大事なのかなと思いますが、どうでしょうか。

○前田智永委員長 主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 確かに、そこに行ってゆっくり過ごすのもいいけれども、そこで楽しみがあればまた次につながるということは言われるとおりでと思いましたので、生涯学習課、保健医療課、各支所とそういう情報を共有しないといけないなと改めて思いました。

○前田智永委員長 他にありますか。私からいいですか。今回のテーマは健康寿命の延伸ですけれども、庄原市として健康づくりのここに力を入れているというか、庄原の高齢者福祉といえばこういうところだというのはどこなのかなと、今まで個人的に探りながら地域の皆さんと話をしたり活動をしてきたのですけれども、例えば、庄原市は健診の受診率向上の取組を結構頑張っておられると思います。他市町と比べても受診率は上がっていますし、結構高いのではないかと私は認識しています。ただ、なみかポイントの付与がありましたよね。あれでかなり上がってきたということで、予算の関係もありますけれども、それが終わって、市民の方からすると何かないのかというような、また下がりつつあるのかなという雰囲気も感じますし、集まり場、デイホームやサロンといった地域の共助による、みんなで高めていこう、支え合っていこうということにせよ、予算の関係であったり、先ほどあったように世話人の高齢化もあったりしてなかなか思うようにいかないという話も聞きます。庄原市の基幹産業として、市長は農業のことも言われていますけれども、高齢者福祉の中で農業のことも見えてこない。シルバーリハビリ体操も、ものすごく頑張っておられると思います。地域の方も自分たちで、高齢者が高齢者を支えてではないですけれども、一緒に頑張っていこうというような風潮も見受けられる中で、いまいち全体的に、あれはいいけれどもちょっとどうなのかなというような感じをすごく受けて、庄原市といえばここだねというところがあつたらいいのではないかと思いますけれども、そういった考え方というか、現場の方はどのように考えておられるのかを少しお聞きしたいのですけれども。課長。

○松永智子高齢者福祉課長 回答になるのかどうか分かりませんが、庄原市は他市に比べて大変広い地域で、1市6町が合併してできたということでそれぞれの地域性があります。前田委員長が言われるとおり、庄原市という1つのくくりでこれだというのは大変難しいです。そのため、地域包括ケアシ

システムの中で、地域の健康課題、高齢者福祉の課題をそれぞれの地域で吸い出すといいますか、その地域に即した内容の高齢者福祉を行っていかうということで、旧市町それぞれをくくりとした地域ケア会議を行っています。そういう意味では、私たちは、それぞれで集まって、地域性を生かしたもので課題解決をするように話をして取り組んでいるのだと。1つ言えるのはそういった部分ではなからうかと思います。今後、まだまだ課題はあります。前田委員長が言われた課題というのは、私たちも特にひしひしと感じていますが、そういった地域性も含めて、各地域の皆さんが自分のところはこうなのだとできるように、しっかりと地域包括ケアに取り組んでいきたいと思っています。

○前田智永委員長 ほかの方は。もしよろしければ、皆さん何かあれば。よろしいですか。主幹。

○元永喜美江高齢者福祉課主幹 地域包括ケアシステムというか、住み慣れた地域でできるだけ長く生活していきたい、しかも自分らしくということを経験しているのかと思われたいのかかなと思います。それに対して、直接的な支援もありますが、側面からの関わりというものがあるのかなと思ったときに、先ほど課長が申しましたように、広い庄原で大きく1つにというよりもその地域ごとに取り組めることを、そこに地域の特性を生かして関わられたらなと思っています。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 慎重に考えないといけないと思いますけれども、私は、そろそろ敬老会事業は終了して、何かフレイル予防というか、高齢者にとって生活が豊かで楽しみを感じてもらえるようなメニューに変えていってもいいのではないかなという気がしています。敬老会事業をそれぞれの自治振興区とか地域でされているのですけれども、スタイルもばらばらで、最近の対象者が対象者、自分たちを自分たちで祝って終わりというような感じです。それと、熱中症対策で会場がなかなか使えないとか、あるいはどこかでしようということになっても会場が狭いとか、いろいろ苦労もあって、モチベーションが徐々に下がりつつあるのではないかと思います。勇気の要ることなのですから、何かその財源で、本当に高齢者にとって豊かで幸せなムーブメントが起こるような事業をそれぞれの地域の特色を生かして行っていくほうに振り分けるようなことはどうでしょうか。難しいですけれども。

○前田智永委員長 課長。

○松永智子高齢者福祉課長 大変難しい課題です。この敬老会には歴史があるというのが、ある意味、今実施している方々への誇りといいますか、この地域を私たちが支えてきた、また支えていただいている方への敬老の気持ちといったものが、特に日本人にといいますか、目上の方を敬うということが根底にあるという部分では、敬老会の意義というのは皆さん大変お持ちですが、岡野委員が言われるとおり、敬老会を維持することがフレイル予防になるのかといえ、正直なところ、なると自信を持って言えるのかということはありません。ではどうすればいいのかというところは、本当に慎重に考えなければいけないと思っています。ただ、岡野委員から御意見いただいたこともまさしくそのとおりで、何かシフトするとか、限られた予算の中ですが、効果的な事業はこれからもどんどん検討していかなければいけないという、私たちの行政の責務もありますので、議員からも御意見を頂いて、それを今すぐにということではありませんが、課題の中での敬老会の捉え方、今後の事業のシフトであるとかそういったことは考えていきたいと思っています。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 敬老会をやめろということではないのですけれども、いろいろな財源を、敬老会よりも、高齢者の方にとって楽しみであったり喜びであったりするようなものがもしあれば、そういうところ

へのシフトもどうなのかなと思ったりしますが、大変難しい問題だと思います。1つは、敬老会を行うのが老人福祉月間なのです。国の法律で地方自治体が啓発事業をしなければいけないことになっているのです。だから、庄原市の場合は、ずっとあの時期に敬老会事業を実施されて、啓発事業という位置づけにされているのだらうなと思ったりしています。なので、皆さんの状況を把握しながら、慎重に考えていく必要があるのかなという気もしています。

○前田智永委員長 御意見ですね。他にありますか。この程度でよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○前田智永委員長 本日はお忙しい中ありがとうございました。それでは、説明者退席の間、暫時休憩といたします。

〔執行者 退席〕

午後2時28分 休 憩

午後2時30分 再 開

2 男女共同参画について

○前田智永委員長 それでは、次の協議に入ります。先般、10月3日・4日に、本委員会の視察として日本女性会議 2025 檀原に参加して、それぞれ分科会等に分かれて皆さんに研さんを積んでいただいたところですけれども、その辺りについて、委員会としてまとめをします。それぞれ報告書を出していただいたと思いますけれども、その中でここは言っておきたいというものを言っていただければ、そこを重点的にまとめていきたいなと思います。どなたからでも結構です、皆さんそれぞれ御報告をお願いいたします。青山委員。

○青山学委員 私がすごく参考になった事項で入れてほしいと思ったのが、女性の社会進出ばかりが声高に言われる中で、男性の家庭進出というキーワードが分科会で出て、正直なところ、私はそういう考えがなかったなと思いました。男性の家庭進出もありますが、根底には自分が食べたものは自分で洗わないといけないと自分の子供にも教えているはずなのに、あるとき、子供に教えていることをしなくなって、それで家事をしないとかそういうことになってきていたのだなと。そこまで深く発信されたわけではないのかもしれませんが、男性の家庭進出と女性の社会進出の両輪がバランスよくあることが必要だということは、私はほかの人にも言った言葉なので、ここは参考になった事項としてしっかり入れてください。

○前田智永委員長 他にありますか。松森委員。

○松森潤平委員 私は、確か第8分科会だったと思いますけれども、南都銀行とかたくさん事例がある中で、育児休暇制度の事例が結構たくさんあったのです。庄原の場合は、育児休暇制度は体力のある企業しかなかなかできないというようなことも言われていて、庄原の実態も多分そうなのだろうなと思っています。ただ、本当に中小企業が多い中で、企業として育児休暇制度を入れるのは難しいことかもしれないですけれども、啓発や普及活動をどんどん行っていくことはすごく大事なことで、中小企業の育児休暇制度をどのようにつくっていくのかはすごく重要な視点だなと思ったので、

そこをまとめの中に何か少し入れてもらえたらうれしいです。

○前田智永委員長 他にありますか。副委員長。

○國利知史副委員長 青山委員が言われた男性の家事、家のことをしっかり行っていくためには、分科会でも言われていましたけれども、育児休暇とかそういう制度的なことはもちろん必要なのですが、残業をせずに早く帰れる。男性と女性どちらもですけれども。今、職員が少ない中で、部署によっては非常に難しいところもあるかもしれませんが、庄原市に関しては、なるべく早く帰れるような体制を早く整えていくことが、男性の家事・育児に関わる時間を増やすという意味でも非常に必要なのではないのかなと。昨日も「よるくる」が終わって夜遅くにここの前を通りましたけれども、2つの部署に電気がついていました。そういうところは、もちろん家事・育児はできないわけですし、今は市長が代わって変化をつけられる時期だと思うので、まずはそういった職員の体制を整えていく必要があるのではないかと思います。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 例えば、国の法律で育児・介護休業法というのがあって、企業はその体制を準備しないといけないのです。ただ、その辺は毎年少しずつ変わったりして理解がとても難しいのです。なので、市の部署としても、そういった法律の改正に対応できるような、自分の企業で規約をつくるサポートが必要なのではないかと思います。最終的には社労士にもチェックしてもらうようになることが1つと、もう1つは、そういう整備をしているのですが、利用する人は少ないという現状があります。それは職場の雰囲気もあるのだろーと思います。何か少し利用しにくいようなところもあるので、その辺の啓発もあわせて、そういうものはみんなで利用しようというような形の啓発も必要なかなと思います。最近、女性の活躍が目立っていると思います。高市さんもそうですし、伊東市や前橋市の市長も結構マスコミに出てきます。市長だからこそ出てくるわけです。あるいは落語家の桂二葉さんとか、そういう状況に違和感がなくなっているのはむしろいいことだという空気なので、とてもいいことだと思います。ただ、そういう空気を現実の職場で啓発してつくっていくという、意識として分かっているのですけれども、具体的に進捗させるときに、少し課題が残るような状況ではないのかなという気がしてまして、その辺の啓発に力を入れていかなければならないということを強調してもらえればと思います。

○前田智永委員長 全く同感です。世間では女性の社会参加が当たり前だということになっていきますけれども、実際に蓋を開けてみると女性は裏ですごく苦勞して前に出ているので、身近なところの制度の変化は、今からしていかなければならない、整理しないといけないところは非常に多いなと私も思っています。他にありますか。近藤委員。

○近藤久子委員 日本女性会議では毎年、内閣府からの数値が出てきて、あそこで出てくるものからは見えにくいのですが、政府として今からの取組は、今年の6月に女性版骨太の方針2025が策定されましたが、基本はそれに沿って進めなければなりません。これは法律ですから。それには、女性に選ばれて、女性が活躍できる地域づくりをなささいということが一番に出ています。それは、全ての人が希望に応じて働くことのできる環境づくりをなささいと、先ほど言われたようなこともつながってくると思います。あらゆる分野の意思決定層における女性の参画を拡大なささい、最低限3割と言っていたのだけれども、まだそれができていないところがあるではないかということで、女性の参画の拡大。それと、配偶者への暴力や性犯罪、性暴力への対策の強化をしないといけないと。これは、困

難な問題を抱える女性への支援に関する法律というものでわざわざつくっています。もう1つは、男女共同参画の視点に立った防災、復興。女子のトイレが少ないということから始まって、セクハラ事件がすごく多いのですけれども、覆い隠されている部分があるので、そういうところをしっかりと見ないといけない。それは、個人の尊厳が守られ、安心・安全が確保される社会を実現しないといけないと女性版骨太の方針2025に書かれているので、そういうところはきちんと押さえないといけないのだと。先ほど前田委員長が言われたように、遅々として進まない部分があるのですけれども、国が、今からは男女共同参画に関する政策を総合的に行うナショナルセンターとして独立行政法人をつくりましょう、男女共同参画機構を令和8年に新設しますと言っているわけです。地域における諸課題解決に取り組む各地の男女共同参画センターと協力、支援しましょうと。せざるを得ない日本という国があるわけです。だから、私たちの意識改革もあるのだろうけれども、法律がどのように変わっていているのか、その法律は何を訴えて、何を国民に、社会に、会社、地域に求めているのかをつかむ必要があるのではないかと思います。トータルとしては、今回、本委員会の全員で日本女性会議に行けたことは、先ほどの青山委員の男性の家庭進出とか、新しい言葉があったり、庄原市の1つの委員会で共通認識が持てたことはすばらしいと思うし、担当課の方も2名行っておられて、男女共同参画プラン策定の委員会の方も行っておられました。体験して生の声を聞く中で、庄原市はどうか、庄原市の企業はどうかということ振り返ってみるチャンスを私たちは得られたかなと思います。繰り返しになりますが、女性版骨太の方針2025は今年の6月に策定されたものですから、それを大いに生かし切っていただきたいなと思います。大きな柱になるのだと思います。

○前田智永委員長 うまくまとめてくださってありがとうございます。岡野委員。

○岡野茂委員 別にここを入れてほしいということではないのですけれども、少し気になったのが、奈良は専業主婦の方が多い、働いておられる人は少ないということです。統計的に見ると専業主婦の世帯は非常にリッチなところが多いということがある。それと同時に、一生懸命働かされている女性の方はなかなか政治参加ができないという統計もある。政治的な参加は専業主婦の方たちが圧倒的に多いという報告を受けて、うーんという感想を持ちました。それだけです。

○前田智永委員長 それはもう少し勉強しなければなりませんね。我々は。

○近藤久子委員 専業主婦がいいとか悪いとかではなく、その御家庭でお決めになられることです。今は共働きで収入を得ないと、それぞれ車に乗りたいたろうし、子供の教育にもお金がかかるだろうし、住宅の費用もかかるだろうし、そういうことで働かざるを得ないということもある。もう1つは、女性たちが働きたい意欲を持ち始めた、それだけの能力を持ち始めた。昔は長男だけ大学に行って、あなたは女の子だからここでやめておけという時代から、そんなに5人も6人も子供はいませんから、女性たちも教育を受けるチャンスができて、そのチャンスを生かし切れる時代になったということで、働きたい意欲があればどうぞということでしょう。

○前田智永委員長 他にありますか。何度でも報告の一端を述べていただいて結構ですけれども、よろしいですか。近藤委員。

○近藤久子委員 生き方×働き方「なりたい自分」の分科会に行きました。「女だから、男だから」ではなく、生きやすい社会にするためにという副題がついてました。その中で、NHKの「クローズアップ現代」や「あさイチ」で取り上げられた、なぜ地方から女性が流出するのか。とにかく地元を離れたかったと答えた若者は圧倒的に女性が多かったという報告がありました。だからジェンダーギャッ

ブがどうのこうのとよく言われるのですけれども、今も146カ国中118位です。男性の賃金の75%しかない女性がいる。背景として、非正規雇用が多い、パートが多い、管理職の比率が低いというような報告を受けて、アイスランドが16年連続でジェンダーギャップ指数世界1位を続けて、それは何なのか。女性の休日をつくったからだ。だって50年前でしょう。そういう報告も受けました。いろいろなところでいろいろな角度から学んだ今回の研修ではなかったかと思います。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 小さいときから、小学校、中学校、高校から男女共同参画の啓発や教育を行うべきだと思います。小学生でも、男性と女性の体の違いとかそういうことも認識しながら、共同で地域社会をつくってこういう意識づけのようなことを各学年である程度教えていくことも大事なのではないかと思います。

○前田智永委員長 近藤委員。

○近藤久子委員 家庭内の夫婦の中で、お父さんが食器を洗う家と、おい帰ったぞ、飯はまだかという家と、その中で育つ子供たちはどう見ているのかなと。大人になったときに、おい飯はまだかと言ったら、別れましようとなるかもしれない。今の若い人たちは意識が変わってきて、同じように買い物に行って、お父さんが子供を抱くという雰囲気になってきましたから、それを子供たちが見ているということを、お父さん・お母さん、おじいちゃん・おばあちゃんもそうですけれども、それが一番大事なのかなと。会話の中で、例えば、妻のことを、おいと呼ぶ家族がいたときにどうなのかなと。名前を呼ぶ人は、智永さんとか呼んでもらっている。おいと言われたら、うるさいわと、私にも名前がありますというような世の中になりました。家庭の中で父親・母親がどういう言葉遣いなのかとか、どういう態度なのか、風呂、飯、寝るくらいのことをしていると子供もそうになってしまいますよね。今からの時代はそんなことをしていると女性に見放されると思います。まず家庭からでしょうね。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 そういう家庭があるとして、子供たちがそういう啓発や教育を受けることで、待てよ、これはおかしいのではないかという意識を持つのも大事だと思います。どちらかというと子供たちは家庭に流されていくので、その辺をきちんと、小学校、中学校、高校で啓発や教育を行っていったら、おかしいことはおかしいと思えるような感性を育てることも必要なのかなと思います。

○前田智永委員長 近藤委員。

○近藤久子委員 逆に、学校は男女共同参画が最も進んでいるところで、ジェンダーギャップの中でも日本の教育はすばらしいのです。そこはすばらしいのだけれども、社会に出てみるとギャップを感じるのが女性たちです。私はあなたの75%しか給料がないのか、という世界に入っていくわけです。

○前田智永委員長 岡野委員。

○岡野茂委員 意識としてはその大事さは分かっているのですけれども、社会に出たときに課題なのです。職場に行ったら、何か女性の役割、男性の役割のようなものが相変わらずあったりとか、言われるように給与が少なかったりとか。要は、意識では分かっているけど、その辺りを克服していかないと、現場で克服していくことが特に大事なのかなと思います。

○前田智永委員長 私は子供というテーマの分科会に1人で参加させていただいたと記憶しているのですけれども、確かに教育分野でそういう男女平等、男女共同参画といったことを推進してきている風潮にはあるのですが、講義の中で、現実的に男女格差はあると言われていました。男女だけではなく

障害の有無であったり、登校するしないといったところで現実的に格差があると。そこを社会全体で、学校だけではなく家庭教育も社会教育も全部必要なのだと、風潮としてこの地域はそれがないよねという地域を目指すことが大事だと習いました。その中で私もはっとしたのが、先ほど近藤委員も言われましたけれども、防災・災害の対応のところで、女性の参画が非常に少ないと。私もそこは自分自身の中でも課題として捉えていて、これまでも活動してきたつもりですけども、家庭での防災とか、お父さんは消防団で出るけれども、お母さんは家にいて自分たちで避難をするというようなことが実際にあるなと思ったのです。なので、私自身もそこにしっかり参画しながら、女性だからできる啓発活動や、女性消防団も、本市には5名くらいおられたと思いますけれども非常に少ないので、そこをどうすればいろいろな人が関わって、家庭の中に消防団が2人も3人もいてもいいではないですかというような話をする中で、もっと頑張らないといけないなと感じましたので、報告としてお伝えしておきたいと思います。非常に実りの多い、本当に意義のある視察になったと感じました。これから庄原市において、どの部分を取り組んでいくべきなのかというような提言のところくらいまでしっかりと、我々としても、もっと学びを深めて進めていきたいと思いますので、これにとどまらず、皆さん、いろいろと情報収集や、地域の方にお話等をしていただいて、またここで男女共同参画について話をしてまいりたいと思います。

3 その他

○前田智永委員長 その他の項目をお持ちの方がおられれば。よろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○前田智永委員長 それでは、本日の会議を閉会します。

午後2時53分 散 会

庄原市議会委員会条例第 30 条の規定により、ここに署名する。

教育民生常任委員会

委 員 長